

末吉小学校改築設計プロポーザル

審査講評

はじめに

鹿児島県内で実施される設計者選定のためのプロポーザル審査に関わり、近年、益々複雑化する社会環境に追随し、未来を予見することが求められる時代に呼応する建築が求められるようになっていきます。それゆえ、本プロポーザルではより多くの実りある提案を募らんがため、全国公募によって実施されました。その賛否はさまざまであることは承知しつつも、相応の効果が期待され、曾於市の公共施設では稀な全国公募が実現できたのは、県内プロポーザルの環境整備に尽力された先人の導きと何よりも曾於市民の皆様と行政が一体となり次世代につなぐ教育への期待と熱意の大きさゆえです。そう断言できるのは本プロポーザル開催に先立ち、基本計画策定のために数を重ねた、末吉小学校教職員やPTA、行政等、多くの方々と交えたワークショップに私自身も深く関わらせていただき、その熱量を間近に感じていたからです。

この度、プロポーザル公告後、34者からの参加申し出があり、期日までに32者の提案書等必要書類の提出を受け付けました。恐らく曾於市にとって、また鹿児島県においても、もしかしたら全国的にみてさえ、この応募数は稀にみる快挙であったと思います。しかし、応募数の数ばかりでなく、全国から届けられたそれらの提案は、どれも大変優れた、曾於市のことに思いを寄せた素晴らしいものばかりで、応募いただいた皆様方、関係いただいた多くの方々のご尽力に、感謝の念は尽きることなく、この機会をかり、改めて深く、厚く御礼申し上げます。

審査経緯

提案書受付直後に早速、各審査委員らへ提案書を配布し、まずは一次審査会に先立ち学識経験者及び建築系専門委員ら6名を招集し提案内容の確認を行いました。そこでまとめられた建築的考察を踏まえ、一次審査会では全委員による審議がなされた結果、二次審査対象5者を選定しました。その後、二次審査対象者によるプレゼンテーション及びヒアリングを含む二次審査会を開催し、すべての審査委員の総意として、この度、最優秀提案者、優秀提案者（次点）を選定するに至りました。

審査の過程において、二次審査対象者はもちろんのこと、先述の通り全ての提案者のいずれもが極めて高い構想力と提案力、計画に対する理解を示していただき、ひとつとして違和感なく選外となった提案がなかったこと、また、限られた期間においてこれほどに曾於市、末吉小学校について多くの方々が力を尽くし考えていただく機会を得られたことは、曾於市の未来にとって大きな財産になるであろうと言い添えずにおれず、本プロポーザルの成

果を是非ともご理解いただきたいと思います。

なお、最優秀提案者及び優秀提案者（次点）は下記の通りで、決定後に各提案者名が事務局より審査委員会にて開示されました。

最優秀提案者 ：提案受付番号 24 番／有限会社 マル・アーキテクチャ東京事務所

優秀提案者（次点）：提案受付番号 11 番／有限会社 ナスカ

審査講評

近年の学校建築は教育の多様化に追随せんと多彩な学びの場の創出や学童の居場所空間への配慮、また、少子化が進む地方においては地域ぐるみでまちの活性化拠点となるべく地域開放を推進しつつ、安全と安心を担保する等、複合的に解くべき課題の果てはなく、末吉小学校とて例外ではありません。さらに学校でなされる教育そのものも日々の変革が求められ、学童に知識や技能習得に対する従順が求めた過去から、自らの思考と探求を促し、教職員と地域の皆が彼らを見守り、導くための学びの場の創出を目指しています。その変革と成熟には数十年、もしかしたら数百年、永遠に続くかもしれず、地域や社会にとっても重大な取り組むべき課題です。そうした背景があり、新たな教育の場の創出に果敢に取り組もうとする曾於市を理解し、提案者らが熱烈に応えんとするがため、本プロポーザルで示された提案のどれもが、それぞれに要点を違えつつも、確実にそれらに応え、変化に追随し、さらなる変革を誘発しようとする力作ばかりであったと確信しています。

まず行われた学識経験者及び建築系専門委員らによる提案書の建築的提案内容を中心に行った確認作業ではコンセプトや配置計画、ゾーニングやプランニング等について精査し、その考察を事務局の協力のもと、一覧表へとまとめました。後日、開催された全委員による一次審査会ではそれらの考察を踏まえながら、全委員らのそれぞれの専門的見地と意見を重ね、多彩な提案書のひとつひとつを読み解いていきました。その過程において、配置計画や建築ボリューム、形態等に対する周辺環境への配慮、ゾーンプランやオープンスペース利用を含む学校建築としてのあり方、提案内容の固有性、独創性に加え実現性等々、適宜評価を繰り返し、全委員による合議で審査を進めることができました。そのひとつひとつの疑義や議論をここにあげ説明することはできませんが、二次審査対象者による提案について、審査会での議論に基づき講評を下記に示します。

【最優秀提案者：提案受付番号 24 番／有限会社 マル・アーキテクチャ東京事務所】

一貫して本提案が審査会で好意的に見られていたのは、校地南側道に沿った「まちのみち」と施設中央を雁行し貫いた「出会いのみち」が、提案者自らがたびたびに末吉地区に訪れ、感じたであろう現在の末吉小学校と地域との親密な距離感を継承しているかのように委員に映ったからだと思います。それぞれの「みち」とグラウンドの間に織り込まれた木造家屋

を思わせる軽快な佇まいに、この学校が決して強いることなく穏やかさを印象付けつつ、より多くの人を引き寄せ、導いてくれるであろう期待が素直に受け入れられたからでしょう。さりどて機能やセキュリティー、構造的な仕組みについて、提案書の柔らかな印象とは裏腹に、とても細密に計画されていたことが信頼性を高めました。

設計取組体制についても注目すべきがありました。少々緊張気味のプレゼンテーションで提案者が発した、東京を拠点とする代表事務所と県内の協力事務所が同等の立場で設計に取り組むという言葉は、質疑等でのそれぞれが補い合いつつの回答にあらわれ、本計画が単に良質な学校建築を地域に残すということばかりでなく、これから益々専門化が進む建築業界にとって、優れた建築家や技術者が互いの専門性をもち寄りなされる設計協業体制としての手本を、この設計チームによってこそ示してくれるであろうとの期待が強くなりました。

学童の多様な学びの場の創出や近年ますますその必要が求められる特別支援学級のあり方、将来に向けた地域開放への建築的誘導、何よりも市民と末吉小学校との関係を密接に結びつけんとする提案者の意思と建築計画に新たな試みは多くありつつ、この提案者にこそ末吉小学校の未来をともに歩まんとする審査会委員の皆がそれぞれの異なるかもしれない未知なる未来を思い浮かべ、それらのどれをも受け入れうる柔軟さと、この建築が開校後の将来に至っても、折々にきたるさまざまな要望に追随しうる可能性こそ、本提案者を最優秀として審査委員会満場で支持した最大の要因であったと思います。

【優秀提案者（次点）：提案受付番号 11 番／有限会社 ナスカ】

末吉小学校を訪れ、校庭からのぞむ穏やかな金御岳を含む景観は曾於市の人々の大きな拠り所になっているに違いないとは、私の第一印象でした。その景観をつなぎ、校庭を包むなだらかな起伏をもつ本提案施設の屋根は、学童と市民に優しく寄り添う学校建築としての印象を決定づけた素晴らしい造形を示していました。その印象は、提案書の理解が深まるにつれ、そこに記されたひとつひとつがまったく裏切ることなく、むしろそれらが高い専門性により裏付けられて丁寧に検討し尽くされた末に導かれたものであることを知り、単なる造形操作にとどまらぬ美しい建築に、提案者に対する信頼が大きく膨らみました。また、プレゼンテーションでの安定感は群を抜いていて、設計、教育等各専門家の言葉のひとつひとつがもつ説得力は大きく、理解しやすい丁寧さを委員の誰もが感じていました。

二次審査会でのプレゼンテーション後の質疑に対し「純木造 2 階建ての学校を是非実現したい。」との応えはとても具体的で、今世紀に至りますます見直される日本における木造建築のあり方をさし示さんとする提案者の思いとともに、それぞれに意図された居場所にひきこもらずに駆け巡る元気な学童の姿への期待があるようにも思えました。それは新たな建築が迎える末吉小学校を、専門的見地や提案者の実績、理念で満たした校舎であるに違いないとの確信を得ることができました。反面、少子化に歯止めのかからぬ地方都市にとって、先の見越せぬ学校施設が予期せぬ姿へと更新していく様も現実として受け止めねばな

らず、学校開放や地域連携等による施設の変化、柔軟な追随性についても注視すべき重大事でありつつ、そのイメージを想起するには十分な理解に至らなかったことに起因して本提案が次点となりました。

(以下講評は受付番号順)

【一次審査通過者：提案受付番号2番／株式会社 手塚建築研究所】

校地中央を一直線に突き切る縦ストライプにゾーニングされた簡潔な矩形校舎を据え、その両翼に学童が駆けるグラウンドと木漏れ日溢れる「共生の森」を配した提案は大胆で、その明快さに注目が集まりました。森の提案や配置計画、ゾーニング、空間構成等の大胆さに比し、既存図書館を再生利用したり、あるものを最大限に尊重する細やかな配慮と、それらのコントラストが魅力でもありました。と同時に、その大胆さ、明快さゆえに賛否は大きく分かれ、審査会でも多くの時間を議論に費やすことになりました。

二次審査でのプレゼンテーションは、建築計画のみならず、教育に関わる先進的で学校の未来を予見させるかの話題も多く、惹かれる内容ばかりでありながら、一次審査時で懸念された森の管理や中高木の落枝、工事中の現校舎での学習環境の確保、開放的な内部空間によるラーニングコモンの有効利用や新たな教育プログラムへの取り組みと構造計画の整合等々、いくつかの不安は提案者の直接の声に耳を傾けることで和らぎながらも、払拭することはできず、賛否の差異は詰まりながらもなくなるまでには至りませんでした。

【一次審査通過者：提案受付番号3番／株式会社 南俊允建築設計事務所】

4つの中庭に包まれた図書室を中心に、回遊空間と散りばめられたオープンスペース、それぞれの境界を曖昧にし、開放された教室が円形に囲む建築計画はコンパクトに納められていました。それでいて提案書ではいくつものシーンが示され、とても豊かで複雑な学童の日常的な学校生活を予感させ、新たな学校への可能性を探りあてようとする提案者の思いを感じました。また、構造は鉄筋コンクリート造でありながら透明度の高い有機的なフォルムの植樹緑化との共創、1、2階を接続する空間の不確かな所在、特別教室を木造として別棟配置を試みた意図、コンパクトに集約した建築空間と校庭への接続等、一次審査時において過ぎる疑問が柔らかに示された提案書により、むしろ可能性であるかもしれぬとの期待が勝りました。しかし、その期待を確たるものへとする説明が二次審査による提案者のプレゼンテーション、ヒアリングから提案書以上のことが明かされなかったのは残念でした。

【一次審査通過者：提案受付番号15番／シーラカンズ K&H 株式会社】

本プロポーザルにおいて様々な教室とオープンスペースのあり方についての提案があったなか、学年ユニットを9グリッドプランに当てはめて多様な学びの場を提供しようとするそれは圧倒的に特別でした。そこには過去にない教育環境を予感させ、ヒアリングでもその新たな試みについて話題となりました。質疑に対する回答で、その革新性は提案者の多く

の学校実績のさらなる展開を自覚的に取り組んだもので、その経験によりつつ、教室とオープンスペースの新たな関係性を示さんとしていることを理解することができました。加えて、計画を注意深く読み込むと、低学年と中高学年の学年ユニットが階数を違え、「そのテラス」を旋回し絶妙に関係づけられた学年相互のコミュニティ創出の意図が浮き彫りとなり、それらは提案者の高い空間構成力に裏付けられているからに他なりません。しかしながら、現在の地方都市が抱える課題たる少子化に、そう遠くない将来、学年ユニットの解体も想定されつつ、予期できぬ小学校の未来に対し、このユニットがどのように更新され、児童たちの新たな関係性を築いてゆくことになるのかを提案者自らの言葉で添えてもらえれば、審査会での印象が変わっていたかも知れません。

最後に

二次審査会の審査対象者となったファイナリスト5者の提案について以上のように要点を講評文にまとめましたが、どの提案も記載しきれぬ創意と魅力、確かな技術力、見識に満ち満ちていて、まだまだ言い足りぬことがたくさんあることをご理解いただき、お許しください。しかしながら、専門領域と役割を違えた13人もの審査委員が、プロポーザル審査では、ややもすると恣意的な審議に陥ることもありがちなところ、建築設計、建築行政等の建築系専門委員らが審議を牽引しつつ、地域、行政、教育、学校等々、それぞれの役割を担う委員が的確にその専門性に基づいた意見や見解をあげ、それらを丁寧に議論し尽くしあえたがゆえ、結果的には最適な審査が行えて、全審査員の総意として最善の結果を無事、導けました。それは本委員会の重要性を知り、かつ伴う重大な責務を受け入れ集まった委員の皆様と盤石の体制でこの委員会を支えていただいた事務局だったからこそでした。

一年前に、本プロポーザル審査委員でもある曾於市教育委員会 中村教育長から「50年後の曾於市の教育を支える学校をつくりたい。」との熱き思いを聞きました。私は「100年後まで行きましょう！」と返しましたが、いまこの審査結果を迎え、末吉小学校の建築のため、曾於市の子どもたちのため、曾於市で暮らすみなさんのために尽くされた、この計画に関わったすべての方々を思うと、これほどのブレーンが揃い取り組む地域であれば200年後だって、なんらの懸念はありません。

さて、これからも私たちは慣例にとらわれぬ、まったく予期できぬ社会へと突入してゆくことになるでしょう。それでも新たな教育を切り拓くことをあきらめず、育まれた子はいずれ直接、間接様々にこの地を支えてくれるでしょう。そこには200年後も元気はつらつなこの地域があるに違いなく、そのために私たちは躊躇せず、新たな道を進まなければなりません。この末吉小学校の建築をてはじめにして。

2024年7月

審査委員会 委員長 川島 茂